

オリエンテーリング in 朝霧 を実施して

静岡県立朝霧野外活動センターコーディネーター 太田正義

平成19年度から、日本キャンプ協会グループが指定管理者として静岡県立朝霧野外活動センターの運営を行うようになった。

コーディネーターとして主催事業の企画を任された私がまっさきに思っていたのが、大々的にオリエンテーリングをフィーチャーした事業だった。NPO法人 M-nop の全面的な協力のもと、ミニOL、ミニアドベンチャーレース、ロゲイニング等、総合的なナビゲーションスポーツのイベントとして実施した「オリエンテーリング in 朝霧」は、毎年定員を超える申し込みをいただき、アンケートもアスリートからファミリーまで高い評価をいただける事業となった。

自慢できることではないが、私自身オリエンテーリングに関しては素人である。大会に出場したこともなければ(乳児の時に親に背負われて出たことはあるらしい)、大会を観にいったこともない。そんな私が、なぜオリエンテーリングの事業を企画したのかについて、まずは書いてみたい。

地図と冒険

小学生の時、チームにわかれて公園や校庭に宝を隠し、ラフに描いた地図に宝のありかを暗号で示し、お互いに探し当てるといった簡単なゲームに熱中していた。そんな遊びをふと思いだしてキャンプに取り入れてみたことがある。

子どもたちは一日中夢中になって隠し、夢中になって探し続けた。彼らが範囲を広げて隠したいと言い出した時、手描きの地図から地形図にかえてみた。隠し場所と地図があっているかは指導者がチェックし、斜面を矢印で示すなどヒントを書き加えた。地図の読み方を教えながら数回やっただけで、ものすごい速さで探せるようになった。

その後、宝をカレーの具や高級な肉、お菓子などにかえていろいろと試してみたが、宝が具体的すぎると、最初に取り入れた時のような熱狂的な宝探しにはなにくいがわかってきた。

子どもたちは宝が好きなのではなく、宝の地図を手にも謎を解き、道なき道を

分け入り探しあてるといった、冒険している気分が好きなのだ。それがスポーツになったのがオリエンテーリングじゃないのか、ということに気がついたのは、指定管理の委託提案書を書いていた時だった。

ほんの少し地図が読めるようになるだけで、子どもたちの世界は確実に広がっていく。さらに高度な読図やナビゲーションスキルを身につけることができるば・・・宝の地図の先にあるものを子どもたちに伝えたい。それが、オリエンテーリングの事業を企画したもっとも大きな理由である。

朝霧高原の魅力を満喫する

富士山西麓、天子山塊との間に広がる朝霧高原は、日本三大湧水池の一つである猪之頭地区、武田信玄の隠し金山があった麓地区、溶岩洞穴が点在する人穴地区など、自然的にも歴史的にもみるべきところが多い場所である。しかし、白糸の滝や道の駅といった観光地以外は、東海自然歩道のようなトレイルでさえも、人影は疎らである。アウトドアスポーツを楽しみに来ている人の多くはパラグライダーで空に浮かんでいる。

県立朝霧野外活動センターは、標高860m、朝霧高原の中程に位置し、どこかの「みどころ」へも出かけやすい場所にある。泊を伴う研修であれば、足を伸ばして富士五湖や富士山へ出かけることも可能であるが、ほとんどの団体は施設が提供している施設周辺を散策するプログラムを導入している。

これらのことは、朝霧高原の豊富「みどころ」は利用されにくいということを示している。その理由を私は「みどころ」までのアプローチの長さではないかと考えている。オリエンテーリングの要素の一つである、地図上に配置されたポイントを探すという謎解きの部分は、その長さを楽しみにかえてくれる。ポイントが設置されただけで、ハイキングでは目もくれなかった道路脇の小山が、枯れ沢が、小道が、がぜん魅力的なものに見えてくる。オリエンテーリングで設置されたポイントを、別の活動へフィードバックさせることを期待したのが2番目の理由である。

しかし実際にやってみると、ポイン

トを選び、探すといった能動的な行動が、朝霧高原の最高の満喫の仕方につながっていた。

センターの新プログラムへ

継続的にオリエンテーリングの事業をやってみて、毎年、その面白さ、奥深さに驚かされる。なんでこの年になるまでOLをやらなかったのか、とちょっと後悔もしている。

朝霧野外活動センターには、年間延べ約7万人の利用者が訪れる。現在この事業で得たノウハウをもとに、一般利用者が活用しやすいプログラム、地図を持って自然の中に出かけるのは楽しいと思ってもらえるようなプログラムを作成している。

来年度は、Siシステムを導入した施設内OL、芝生広場や体育館でのクイック0を提供する予定である。また、新しいパーマネントコースもオープンする。その後は、施設内アドベンチャーレースのプログラム化に取り組む予定である。

(太田正義)